

【話題提供資料】

社会教育の在り方に関する特別部会（第4回）

（テーマ）

社会教育主事・社会教育士の役割・位置付けの明確化

新居浜市生涯学習センター 関 福生

第1テーマ：社会教育行政の中核として求められる 社会教育主事の職務内容はどのようにあるべきか

① なぜ、社会教育主事はずっと減少しているのか？

② 社会教育主事の職務の“曖昧さ”と“柔軟さ”

③ 社会教育主事はずっと社会教育主事

④ 社会教育主事のアイデンティティとは何だろう

⑤ 『指導・助言』から一つ踏み込んだ職務内容の明確化

はじめに

社会教育主事を取り巻く環境の変化

私が社会教育主事に始めて発令されたのは昭和59年度でした。

その時、社会教育主事の数6,605人、市部では93.9%配置

それが令和3年度には1,451人(22%)に減少し

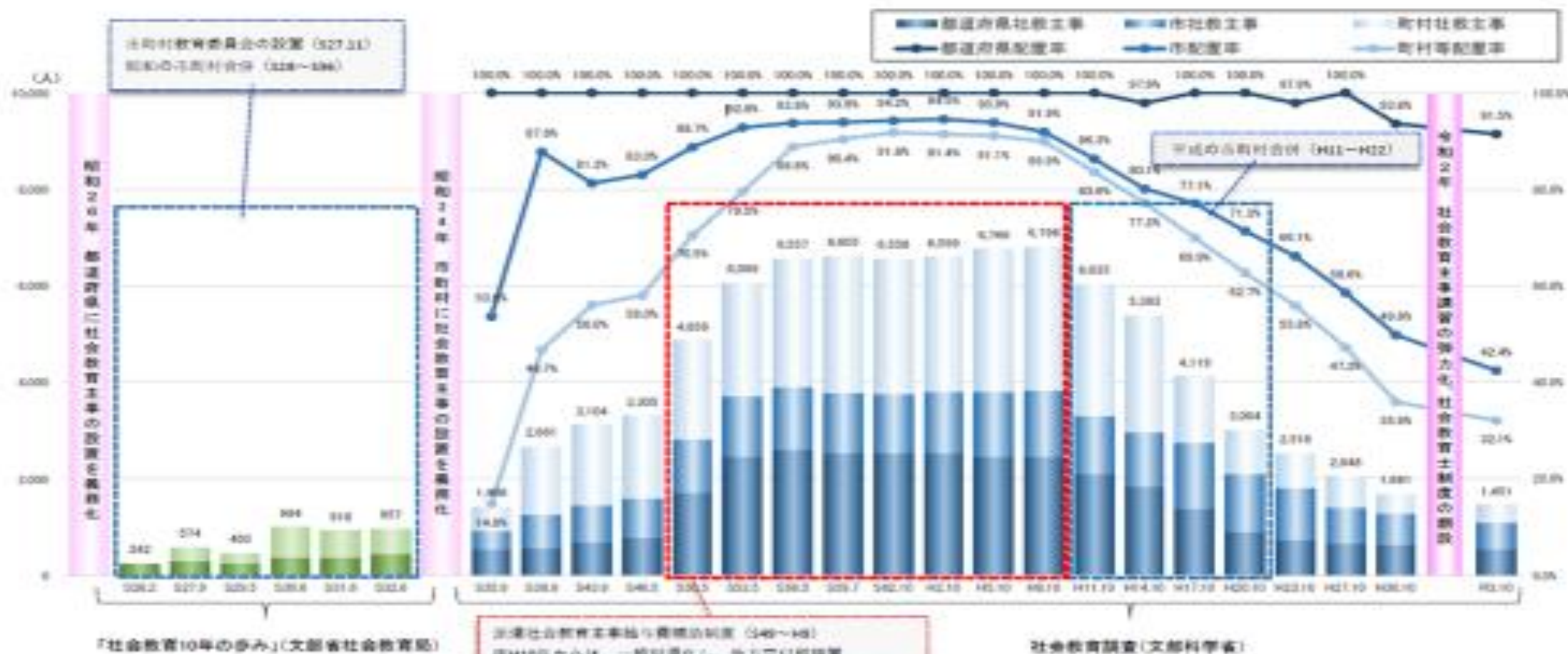
配置率も42.4%と半分以下になった。

社会教育法で必置とされながら減少に歯止めがかからない。

その原因が何かを、検証することが大事だと感じます。

派遣社会教育主事の一般財源化(H10) 平成の市町村合併(H11~22)だけじゃない

都道府県・市町村教育委員会における社会教育主事配置状況



(注) 本資料は、「社会教育主事の減少と考える」(『社会教育』通巻第766号(2010年4月全日本社会教育連合会)、「地域の生涯学習推進と指導者～社会教育主事の養成と世帯を視点に～」(札幌国際大学 浅久保 豊)の資料を基にして作成。

〔出典〕「社会教育10年の歩み」(文部省社会教育局)、「社会教育調査」(文部科学省)

社会教育主事がなぜ減ってきたのか？

1. 不要論 (社会環境の変化によるもの)

社会教育から生涯学習へ 社会教育関係団体の衰退 補助事業の減少

2. 不用論 (社会教育主事の活動によるもの)

やっていることが見えない、何もやっていない、社教主事でなくとも

3. 無用論 (政治的な影響によるもの)

社会教育主事がやっていることが首長にとって邪魔になるのか？

社会教育主事の職務は法律上は極めて曖昧な表現ゆえに、 その背景にある大切なものは伝わりにくいのではないか。

法律上明示されていないがゆえに、特に、人事面で説得する理論武装が困難になっている。

雪崩現象を食い止め、設置を促進するためには存在意義の明確化が必要ではないか。

具体化していない理由は、社会教育が規制行政ではなく、奨励行政のため
柔軟に、自由自在に動くことのできる喜びは何物にも替え難いけれども…
社会教育法制定時の当たり前と現在の感覚は大きく乖離しているのではないか。

「社会教育主事は、社会教育を行う者に専門的技術的な助言と指導を与える。ただし、命令及び監督をしてはならない。」

（社教法第9条の3）

「社会教育主事は、学校が社会教育関係団体、地域住民その他の関係者を得て教育活動を行う場合には、

その求めに応じて、必要な助言を与えることができる」

（社教法第9条3の2）H20年追加

学校教育領域の教育専門職である指導主事の職務は

「上司の命を受け、学校における教育課程、学習指導、その他学校教育における専門的事項の指導に関する事務に従事する。」

社会教育主事は“教育専門職”と“一般事務職”の二つの役割を担う。 孤立させないように、複数配置(社会教育主事補)・元職の相談機能が必要

多くの社会教育主事は専門職と同時に、ラインにおける一般事務職である。
社会教育を行う者であり、同時に指導・助言する者という両面を併せ持つ。
実際はその両面を持つゆえに、有効な指導・助言ができる
ラインの仕事では、役職者の権限が優先され、指導・助言といっても上司の命に従うものに
孤独な社会教育主事にしてはならない！

都道府県社会教育主事は複数人配置されていることが多い。チームで動いている。
市町村への指導・助言という立ち位置も明確である。
社会教育主事にも指導・助言を求められる存在が必要なのかもしれない。

社会教育主事の発令の際の要件(年齢・役職等)を見直すこと

自分は、20代から30代(一般職)、40代～50代(管理職)と教育長時代に社会教育主事として仕事をした。
それぞれの時代において社会教育主事としてやれることの違いや期待されるものの違いを実感した。

第一段階(20～30代) 自らが実践する過程を通じて、他者との関係性を増やしていく。

第二段階(40～50代) 自分が蓄えてきた信頼関係を活かして、調整・ビジョン創造を担う。

第三段階(60代～) 自分がそれまでの体験の中でいただいた恩を次の世代に送っていく。

20代の社会教育主事に50代の役割を求めることには疑問を抱く。それぞれの段階に応じた社会教育主事の身の処し方が許容されるための仕組み、社会教育主事のキャリアデザインをどう形成していくか。よき上司に恵まれ、動くことができる者とそうでない者の格差が縮まる仕組みも必要かもしれない。

- ▶ 指導主事は本市の事例で言えば、教頭職にあたる年代層が務めることが多い。校長はじめ各層の教員に対して指導・助言するには一定の知識技術と経験年数が求められる。社会教育主事講習修了はエントリー条件という前提であれば、そこからどう育っていくのを支えていくかを示すべきではないか。

社会教育主事経験者の“経験知”を活かすべきでは

最近、本市でも過去に社会教育主事発令を受けた者が、退職後再任用で社会教育課勤務となり、自主的に経営論と支援論を再受講した上で、社会教育主事発令された。しかしながら、社会教育主事としての指導・助言といった職務を担うことなく、補助的な業務を担っていた。社会教育主事資格の名義貸しになってしまうと、ますます社会教育主事の存在意義が問われてしまう。ちなみに彼は一年間で職を辞してしまった。

多くの自治体でも、社会教育主事講習修了し発令を受けた元社会教育主事がいる。それらの人が60歳の役職定年後の新しい仕事として社会教育主事として活躍できる道をつくることの意義は大きいと思われる。これまで築いてきた社会関係資本を活かした活動や、若手社会教育主事との協働が生まれれば理想的である。

現状では、過去の受講修了資格は再度発令の際には新規課程での更新は絶対条件ではないが、「社会教育経営論」や「生涯学習支援論」のエッセンスを短期研修で補充して再登板することを検討しても良いのではないだろうか。

私見ですが 社会教育主事が大事にしたい資質とは

1. 自らが学ぶ人になる 学び続ける文化が育まれる
2. 多様性を尊重する 対話の先に共通了解を探る
3. アスピレーションを持つ みんなの大志へ膨らんでいく

社会教育主事はスーパースターではない、
地上の星を輝かせる役割を誇りに思えばそれでいい

“機関車型”より“触媒型”の 社会教育主事が評価されることが大事では

昭和の頃には社会教育主事とは独自のキャラクターをもって、地域を引っ張っていく機関車のような方がいた。そんな先輩に憧れて、新しい何かを求め我武者羅に働いていた時期があった。

社会教育主事が減少し始めた平成10年頃だった。ある人から言われたのが、「あなたがなくなった後のこと考えたことあるか？」の一言だった。周囲のことや将来のことなどあまり考えず、やったらいいと考えたことをやっていくことに生きがいを感じ、自らの理想を主張して、多様な人の考え方を受け止められない「自力本願」の時代だった気がする。ネットワーク型行政の要になるには「他力本願」の気持ちが大事だと知った。

牽引型のリーダーより、サーバントリーダーを目指したい。

人づくり・地域づくりというより、“人育ち・地域育ちを支援する”が似合っているのでは

“触媒”とは、原義「結び目などを解く」こと

自らは変化せず、化学反応の際に活性化エネルギーを低くし、反応を活性化させるもの
変化を早める場合も、遅らせる場合も存在する。 黒衣(くろご)役

法律上に職務として明記できる可能性があるものとして

1. 社会教育計画を策定する際、専門性を発揮し、社会教育委員とともにに関与すること
社会教育計画を策定している自治体の社会教育主事は既に関与しているかもしれないが、法に明記することで、社会教育行政全般への包括的な役割が明確化されるのではないか。
2. 首長部局の協働領域において、社会教育主事が求めに応じて指導・助言できること
社会教育法第9条3の3の学校と地域の教育活動と同様の内容で追加することによって、行政課題解決の基盤に「学びの意義」を定着させることが可能になる。社会関係資本を一般行政に反映する。
3. 自治体内の社会教育士のつながりを構築し、コーディネーター、ファシリテーターの役割を担うこと
地域内にどのような社会教育士が存在するかを把握し、ホロニクな関係性をつくれれば理想ではないか。

ホロニク：自律的で異質な個が集合しているにもかかわらず、全体として調和がとれている状態

第2テーマ 社会教育士の更なる活躍を促進する観点から、 社会教育士の役割・位置づけはどのようにあるべきか。

既に7,000人を超えた社会教育士が、これからも高いモチベーションを維持して活躍してくれる場を創ることができなければ大きな損失になります。ボランティアではなく、**プロフェッショナルとして活躍できる場**、年齢や性別に左右されない活躍機会が求められていると思います。

これまでの社会教育の人材育成の失敗は、養成すること自体が目的になってしまい、活躍できる機会がない出口なき戦略の下に研修を実施して人材バンクをつくってきたことにあったと考えます。同じ轍を踏まないためにも、今、具体的な出口戦略を示すべきと考えます。

社会教育士が活躍する場として想定されるもの

- ① 公民館等の社会教育施設の職員として任用されること
司書・学芸員とは違う専門的能力を発揮できる人材を配置する。
- ② 学校と地域をつなぐ人材として学校に配置されること
CS・地域学校協働コーディネーター・キャリア教育や探究型の学びの担い手
- ③ NPOや民間企業の内に社会教育士が増えること
- ④ 首長部局の住民との協働で推進すべき行政領域に配置されること
- ⑤ 社会教育主事への登用 （東京都・北海道 経験を活かして）
- ⑥ 地域運営組織のコーディネーター 地域おこし協力隊

★社会教育士自らがスキルアップ研修を企画立案できないか 文部科学省実証研究事業

社会教育士がつながる場(新しいプラットフォーム)への期待

恥ずかしい話ですが、私は社会教育士NOTEの存在をつい最近まで知りませんでした。以前、「試行！社会教育人材ネットワーク」というものには参加させていただいていたのですが、Slackなるものをあまり理解しておらず、いつの間にか縁遠くなってしまいました。社会教育士NOTEは2021年4月28日スタートということなので既に3年半の歴史を刻んでいます。その内容も、多様な領域で活躍している方々が自らの思いを語り、やる気一杯で、楽しげですね。

ここに参加すれば、何かに出会うことができる、誰かとつながることができるという期待感や安心感は社会教育士にとって大事なことだと思います。また、全国で取り組まれている先進的な活動の紹介などもこの中に蓄積されればいいなと感じます。

これまでの“つながり”を振り返ってみると

昭和、平成の時代には社会教育・生涯学習情報ファイルという加除式の書籍があった。そこに、全国各地の先進的な活動を担当者自身が情報提供していた。そこからつながりが生まれた。

文部科学省が呼びかけた「公民館海援隊」という公民館ネットワーク(平成22年5月18日:22公民館)全国の公民館のつながりが生まれ、そこで出会えた人たちと議論を交わし相互交流した。**しかし、同時につながりをうまく継続していくことの難しさも感じた。**

既に個々の社会教育主事講習実施機関等の修了者のつながりが生まれている。それを**全国的な緩やかなつながり**に発展させることの可能性を探るべきではないか。更なる進化のためには、社会教育士が主体的に運営するプラットフォームになれば良いと思う。**全国どこにどんな社会教育士がいるか**、それが一目でわかるデータベースが整備され、情報共有できれば新しいつながりが生まれるはずだ。

第5テーマ 若年層を中心に社会教育への関心や参画を広げるためにどのような方策が考えられるか。

高校のカリキュラムに探究の時間が組み込まれ、私どもの地域でも高校生が大人達と地域課題の解決について学び合う機会が増えてきた。地域教育実践交流集会という事業を国立大洲青少年交流の家を会場に行い、今年で17回目を迎えた。今年も12月7日から8日に開催されますので、興味のある方はぜひご参加ください。

最初は子ども達の未来を支える感覚を持った大人の集まりだったが、今ではZ世代の参加が一気に増え、半数は若者という状況に様変わりした。まさに、若者が自分達の未来を創り、大人がそれを支援する形態に変わった。全国各地で若者が今とても元気に地域の最前線で動いていることを頼もしく思う。

若者たちの新しいムーブメントを更に発展させるきっかけになり、将来の社会教育士への導線として「ユース社会教育士育成のための学びのプログラム」(固い名前ですみません、仮称です)のようなものを全国オンライン配信、社会教育士NOTEのようなプラットフォーム上の配信で展開できないでしょうか。

今回、ここにおられる小見委員や東委員と接して一層その思いが強くなりました。高校生の頃から地域社会との関係性を構築してきたことが今日につながっているのでしょう。高校や地域には社会教育的な感性をもった人がいて、色々な刺激を受けてきたはずです。彼女たちのような若者が増殖する仕組みが必要ではないかと思うのです。

未来へ種を蒔かなければ、芽は出ないし、花も咲かない。
今こそ、学校教育と社会教育が協働するチャンスだ！

高校の先生の中には社会教育が苦手という人も多いはずだ。やったことがないから不安という人もいる。でも、生徒には充実した探究の時間を過ごしてもらいたいと願っている。国社研の社会教育主事講習もB日程の生涯学習概論や社会教育経営論はeラーニングで受講可能です。

高校生をターゲットにして、地域づくりや社会教育に興味関心を持ってもらえるようなプログラム、特にファシリテーション能力の向上などのスキルや全国各地の最新情報などを組み込んだプログラムを提供できれば、将来、社会教育主事や社会教育士になって働きたいという人が誕生するのではと期待します。またその中には先輩からの成功談や失敗談も交えて語っていただき、リアルな社会教育の楽しさが伝えられればいいと思います。さらに社会教育士の皆さんにもぜひ情報提供してもらいたいと思います。

高校の授業カリキュラムで取組むもよし、部活動のようなものでも活用できる、そんな教材があれば高校の先生にとっても負担感の軽減につながるはずです。何よりも社会教育の明るい未来に向けてタネを蒔いておくことが大きな意味を持つのではないかと感じます。

終わりに 今こそ、社会教育の不易流行を

今回、話題提供の機会を与えていただき、自分の社会教育人生で出会った社会教育主事の方々に連絡を取り、情報交換する機会を持ちました。社会教育の現場を離れている人はみんな、社会教育のことを懐かしく語ってくれました。中には、現場を離れてもなお、熱く現在のわが町の社会教育の将来を憂う人がいました。社会教育主事はハンナ・アーレントの言葉を借りれば「労働」ではなく、「仕事」でもなく、まさに「活動」の領域なんだと改めて感じました。牧野副部長が以前の部会で語っていた宇沢弘文氏の「社会的共通資本」を守り、未来につないでいく営み・制度であると改めて感じたところでした。

皆さんからの忌憚のないご意見いただければ幸いです。